

平成二十年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十一年三月

社団法人 高山市文化協会

序

平成二十年度、高山市から委託を受けた「高山市近代文学館調査・研究」については、郷土の近代文学の発展に大きな影響を与えた「小峰大羽」について、保存された資料のうち一部について調査整理を行なったので、ここに目録としてまとめました。

社団法人 高山市文化協会
会長 小鳥 幸男

目次

一 掛軸	2	
① 福祿寿像図	2	
② 観音像図	2	
③ 松風や木地のろふちに気のすめる	2	
④ 洗はれて馬が帰るよ夏の月	2	
⑤ よき水の笈にて住み新茶の香	2	
⑥ 風に日のよはりゆく鴨鳴けり	2	
⑦ 梅雨の明け遠雷をこよみ哉	2	
⑧ 観音像図	3	
⑨ 白雲の長閑に比枝をはなれたり	3	
⑩	3	
⑪ 月は天心に有りただ落葉する	3	
二 拓本	4	
① 東照宮境内句碑	4	
② 夏草に一路あり登山口と知る	4	
三 写真	5	
① 雲橋社句碑	5	
② 設計図（蘭亭遺稿）	5	
四 屏風	6	
五 編額	7	
六 書籍	8	
① 小峰大羽先生御評	8	
② 蘭亭遺稿原稿	8	
③ 飛驒史壇原稿	9	
④ 大羽原稿	10	
⑤ コダマ原稿	11	
⑥ 鈔俳句原稿	12	
⑦ 小峰大羽百句集	12	
⑧ ときわ	12	
⑨ 運材図会	12	
⑩ 蘭亭遺稿 前編	13	
⑪ 蘭亭遺稿 後編	13	
⑫ 十二月句画讃	13	
七 案内状	18	
① 「雲橋社」立机式	18	
② 岐阜県史蹟指定報告祭	18	
③ 婚姻披露宴 福田吉郎兵衛	19	
④ 手紙	19	
八 書籍	20	
① 飛驒史壇	20	
九 下絵	25	
① 人物画	25	
一〇 拓本	27	
一一 落款	28	
一二 色紙	29	
一三 短冊	36	
一四 八寸	44	
一五 陶器	45	
① 皿	45	

② 盃	46
一六 春慶膳	47
一七 參考資料	49
① 年譜	49
② 著編書	49
③ 「小峰大羽」展	50

小峰 大羽

本名 小峰邦寿。明治六年 東京神田に生れる。

明治二十四年 十八才で府立築地中学校を卒業するまでの間、画を狩野洞谷に学ぶ。

明治二十七年 俳句作品を発表し始め、三十才で東亜新報社を創立する。

三十七才には、俳諧雑誌「高潮」を発行し主宰となる。文学は尾崎紅葉に学び、東京において美術文学等芸術に関して活躍している。

明治四十五年 飛驒を訪れたのを機に、大正二年には高山に移住し、翌年には押上森蔵・岡村利平らと飛驒史談会を設立し「飛驒史壇」を発行、編輯を担当した。

昭和三年「山ずみ会」を結成。他に「蘭亭遺稿」上・下巻の編集・発行をするなど、飛驒地方の俳句を始め文学・芸術・歴史研究に大きく貢献している。

昭和七年五十九才で高山を離れるが、その功績は今も高く評価されている。

平成元年には、東照宮境内に(社)高山市文化協会によって句碑が建立された。

今回、高山在住の折の作品の一部について調査したので、報告書としてまとめた。
以後、引き続き資料の発掘と調査を行い、その成果を広く公表したいと考えている。

一 掛軸

① 福祿寿像図



② 観音像図



③ 松風や木地のろふちに氣のすめる



④ 洗はれて馬が帰るよ夏の月



⑤ よき水の笥にて住み新茶の香



⑥ 風に日のよはりゆく鴨鳴けり



⑦ 梅雨の明け遠雷をこよみ哉



⑧ 観音像図



⑨ 勝とりの素袍の袖にうたひけり



⑩ 白雲の長閑に比枝をはなれたり



⑪ 月は天心に有りただ落葉する



二 拓本

① 東照宮境内句碑



② 夏草に一路あり登山口と知る



三

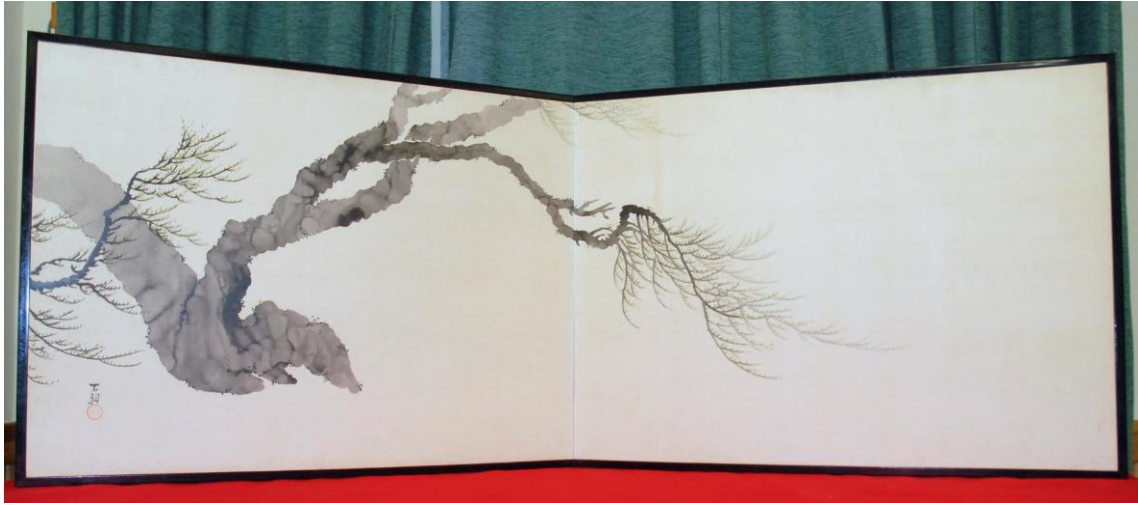
写真

① 雲橋社句碑



② 設計図（蘭亭遺稿）





『風炉先屏風』



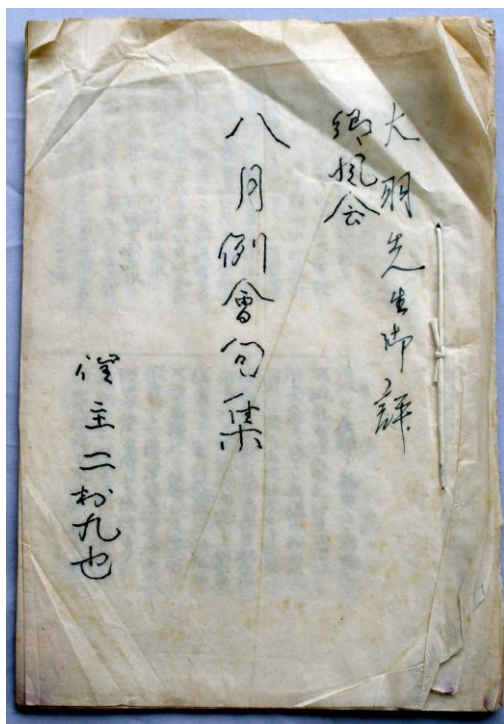
『山は飛驒高波と月に晴がまし』

六

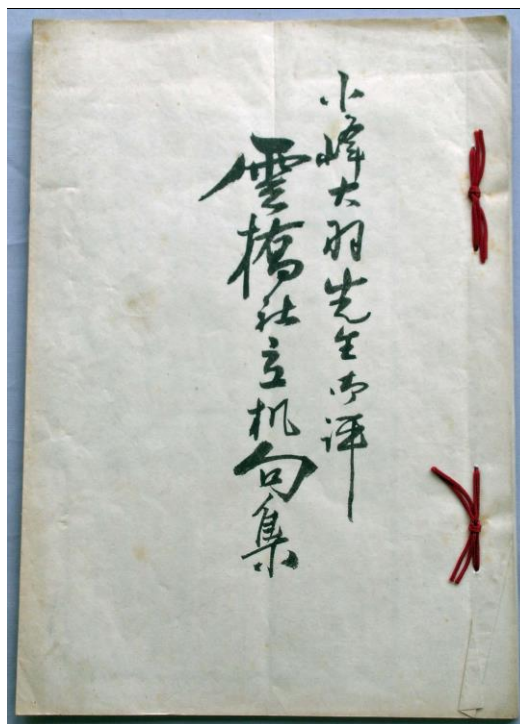
書籍

①

小峰大羽先生御評



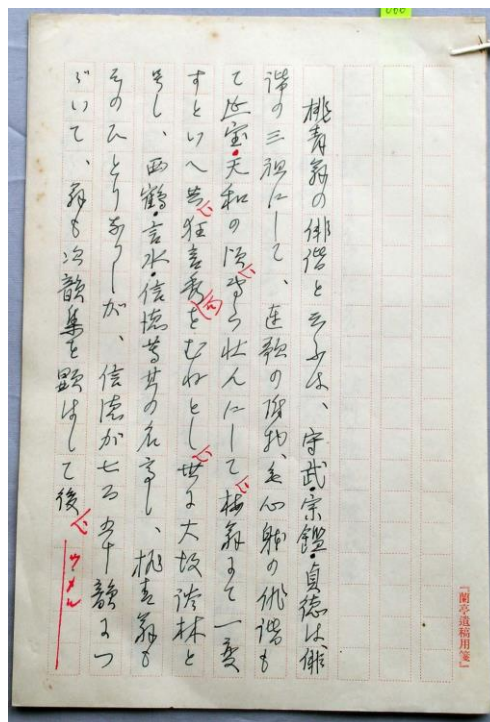
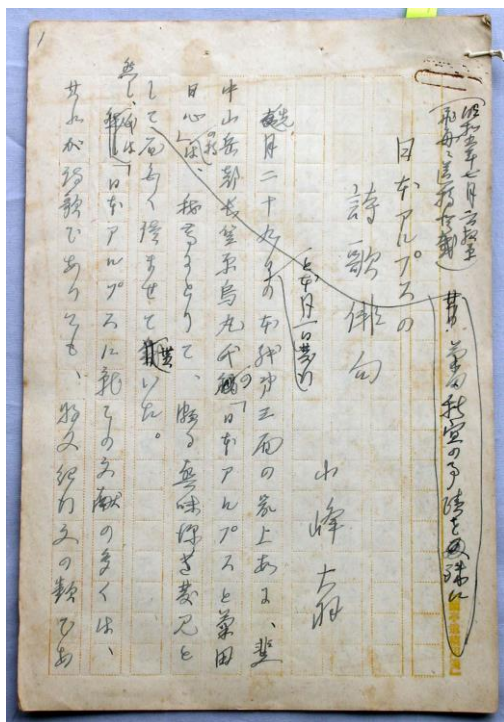
『八月例会句集』



『雲橋社立机句集』

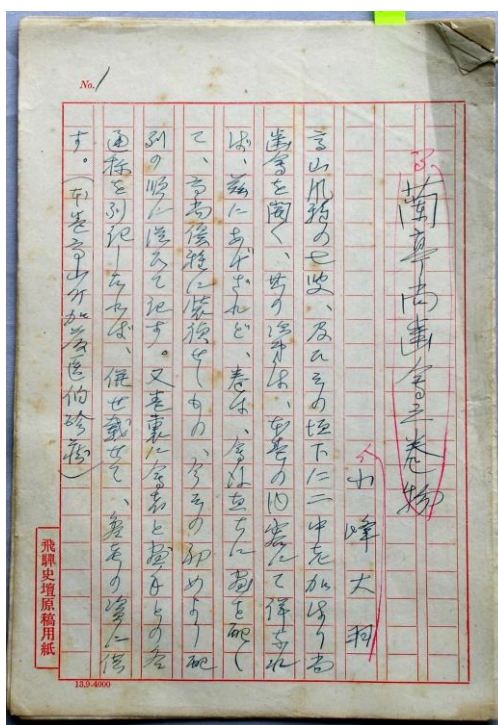
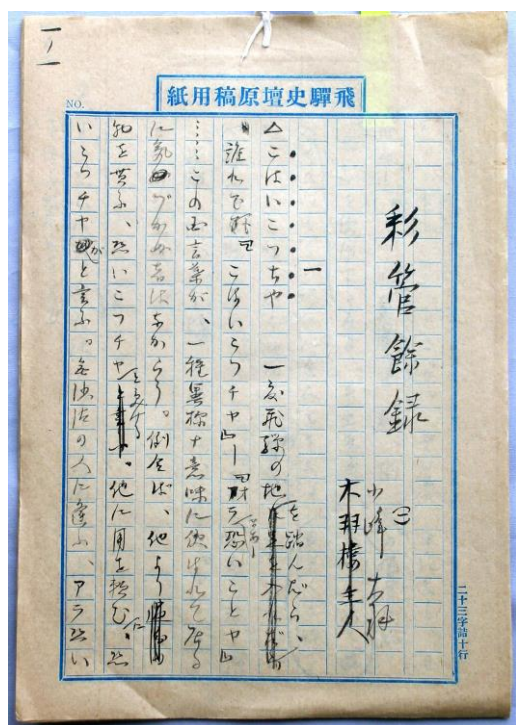
②

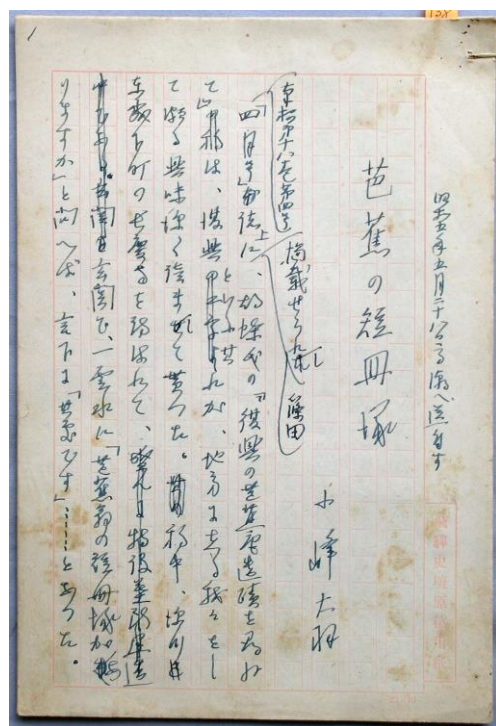
蘭亭遺稿原稿





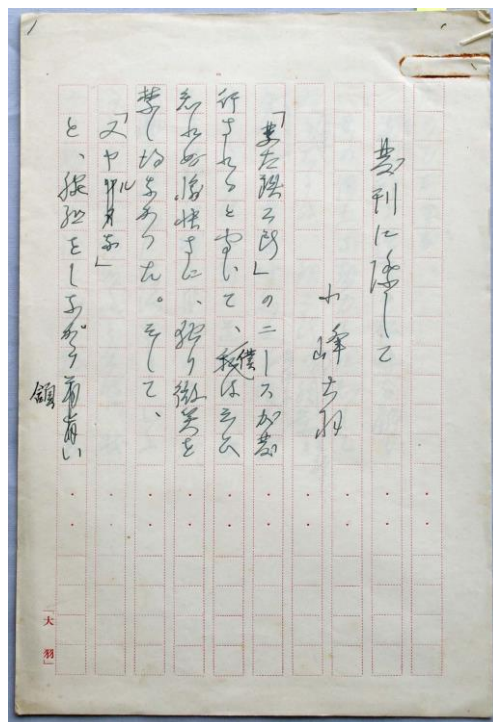
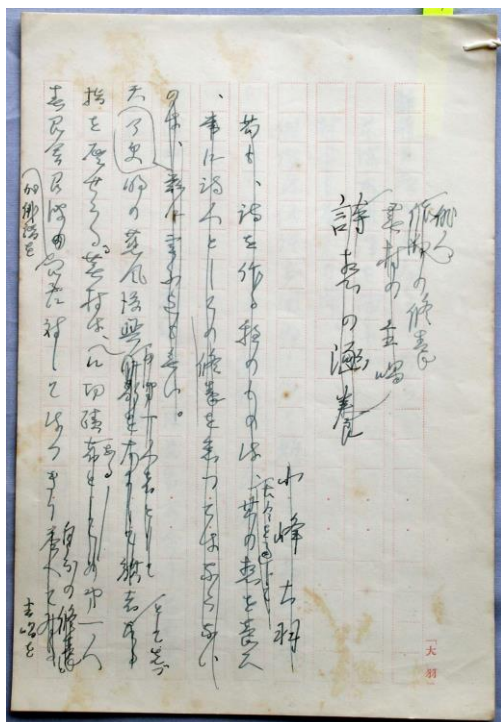
③ 飛驒史壇原稿

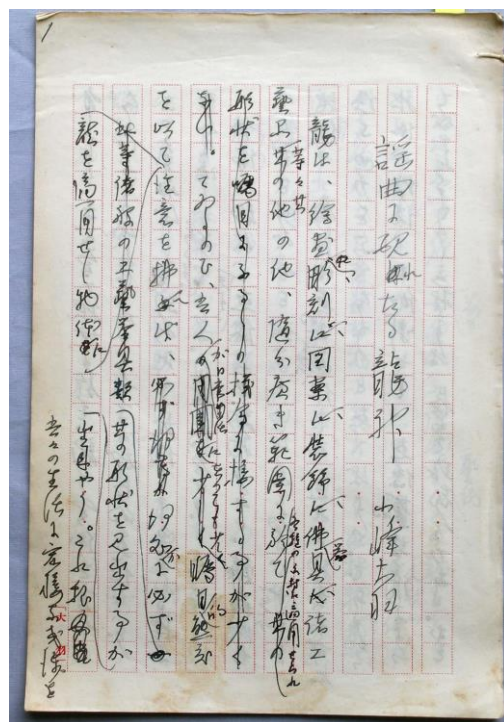




④

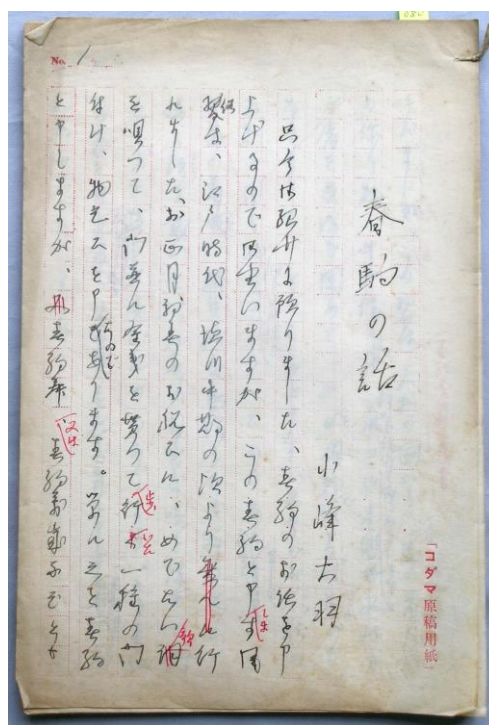
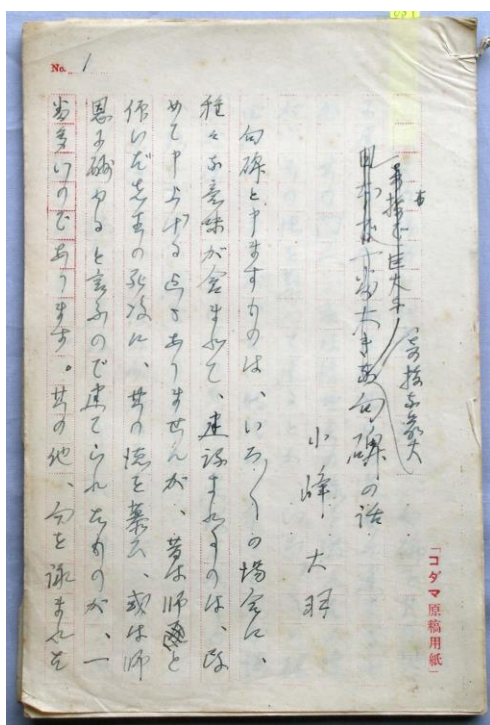
大羽原稿



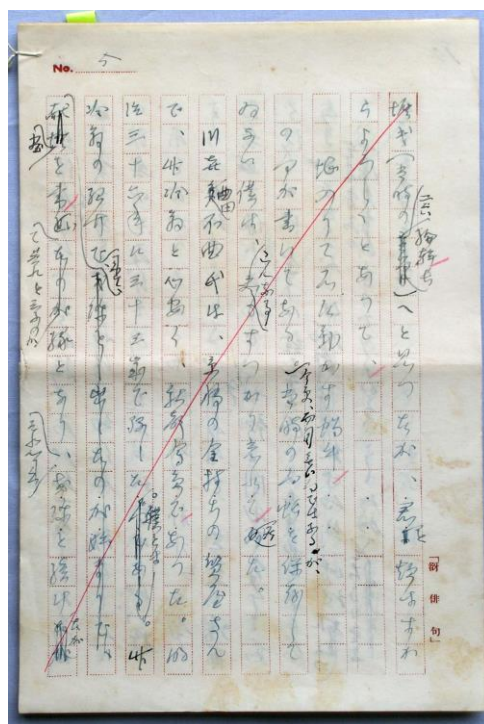


⑤

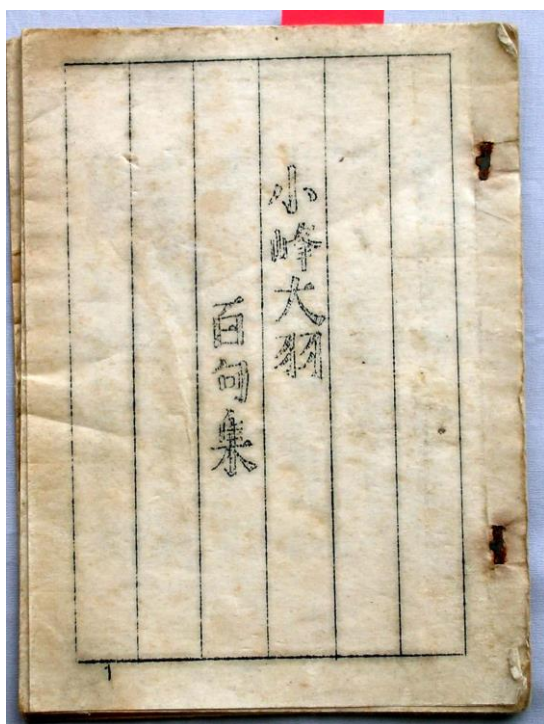
コダマ原稿



⑥ 研俳句原稿



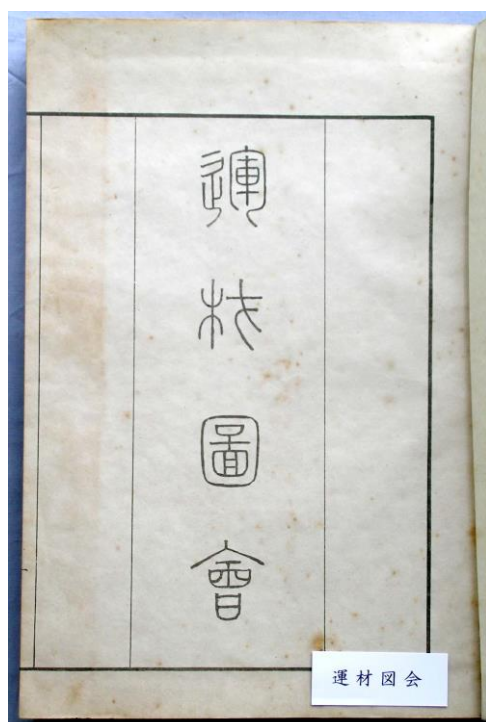
⑦ 小峰大羽百句集



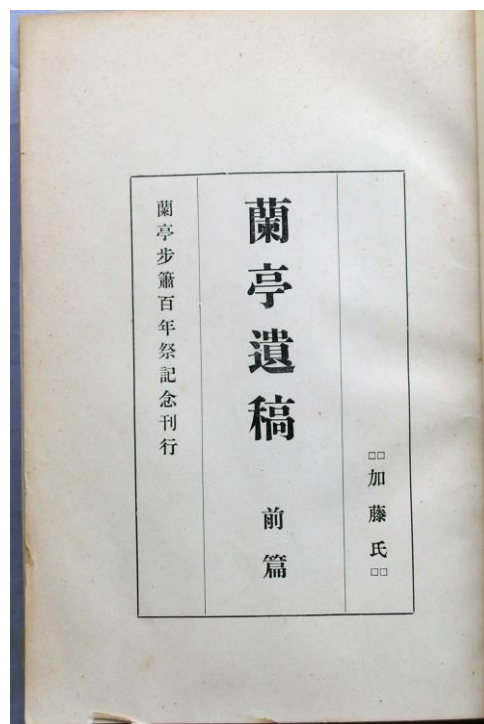
⑧ ときわ



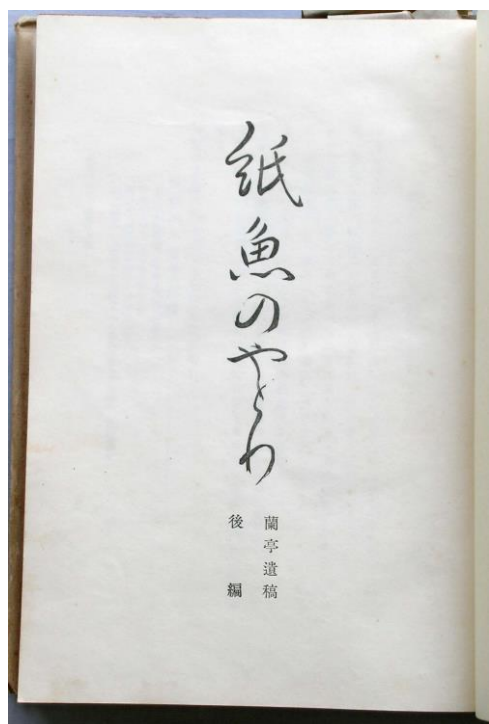
⑨ 運材図会



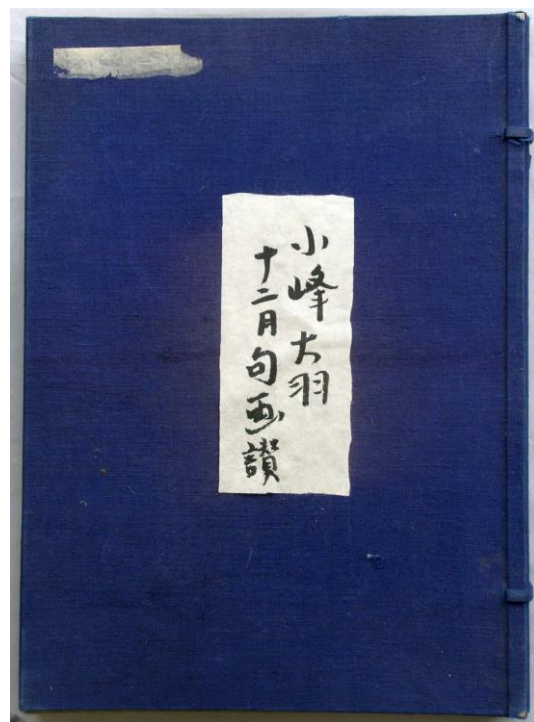
⑩ 蘭亭遺稿 前編



⑪ 蘭亭遺稿 後編



⑫ 十二月句画讃



『正月や 何にたとへん 朝ぼらけ』





『年玉に 梅おる小野の おきな哉』



『三条の 橋を超えたる 御慶哉』



『初午や 祢宜にむけたる ○○殿』



『乾鮭も 空やのやせも 寒の内』



『前に鐘 そのき給へ けん嘩買』



『春の雨 硯にうけて 仮名かん』



『五月雨や たくみに上る 青蛙』



『鶴に連れて 里は〇〇 関の松』



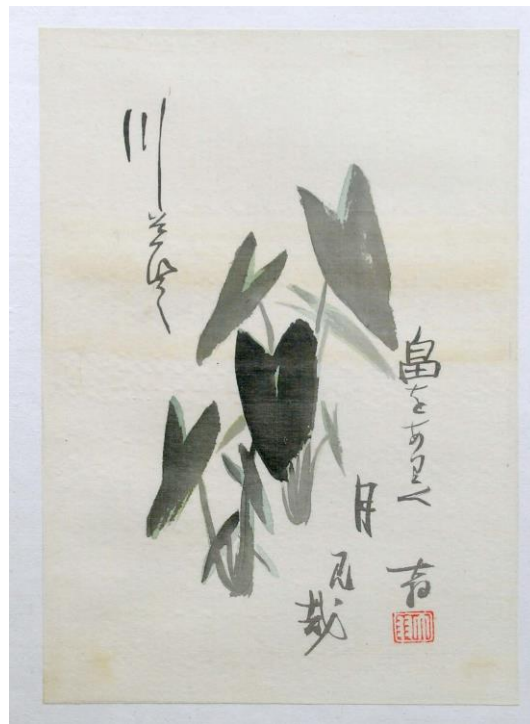
『秋立つや 白髪もはへぬ 身の古び』



『夕闇や すゝしき花は なんの草』



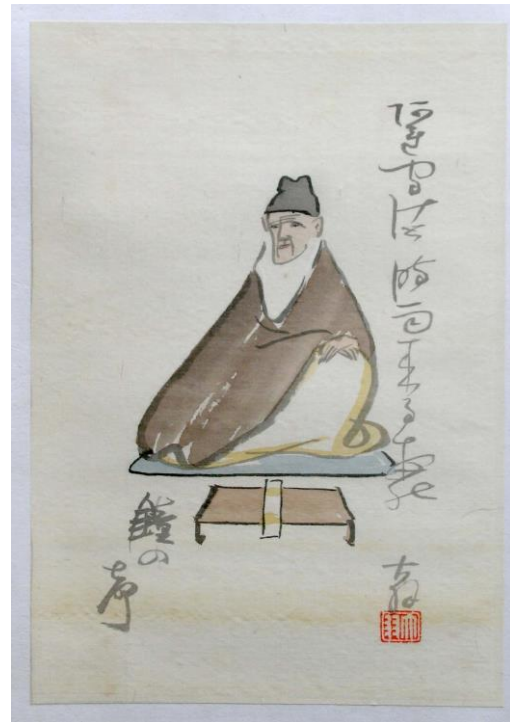
『秋の末 身もふるはせて 虫の声』



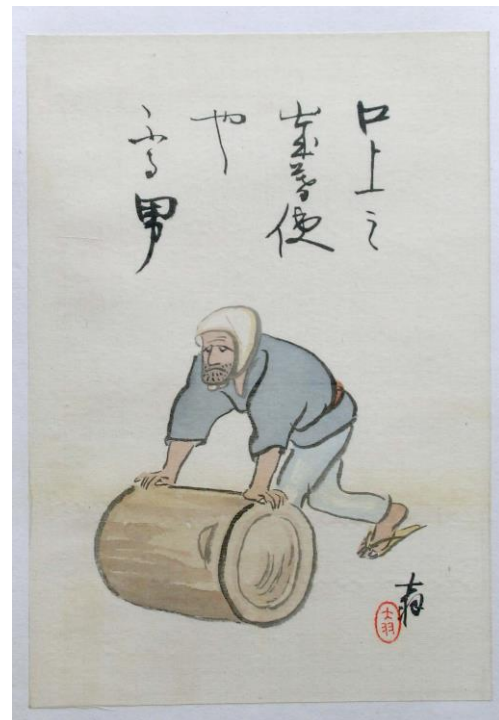
『川〇〇〇 畑をありく 月見哉』



『西吹けば 東へたまる 落葉哉』



『あれ間けく 時雨来る夜の 鐘の声』

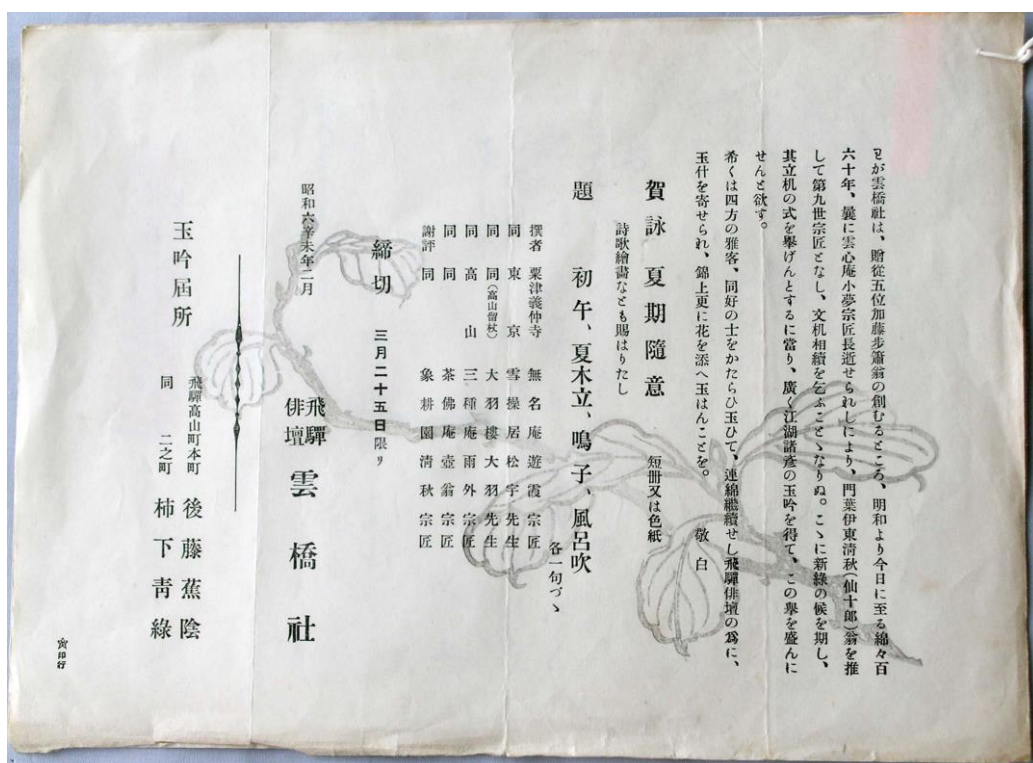


『口上の 歳暮の便りや ふる男』

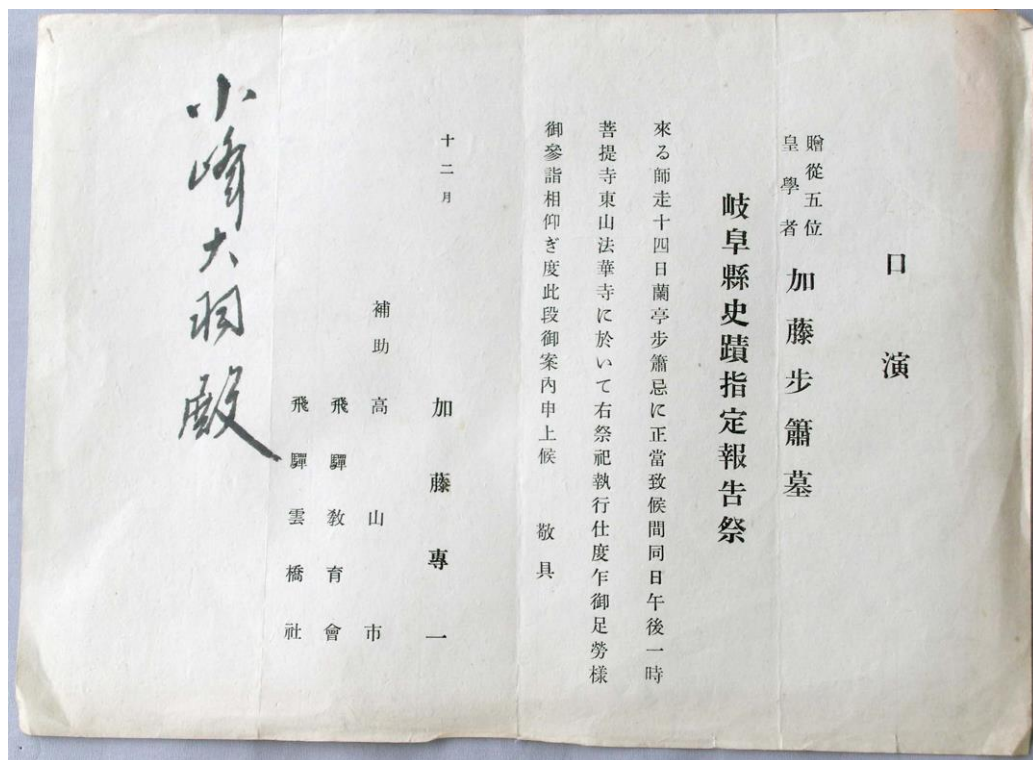
七

案内状

① 「雲橋社」立机式

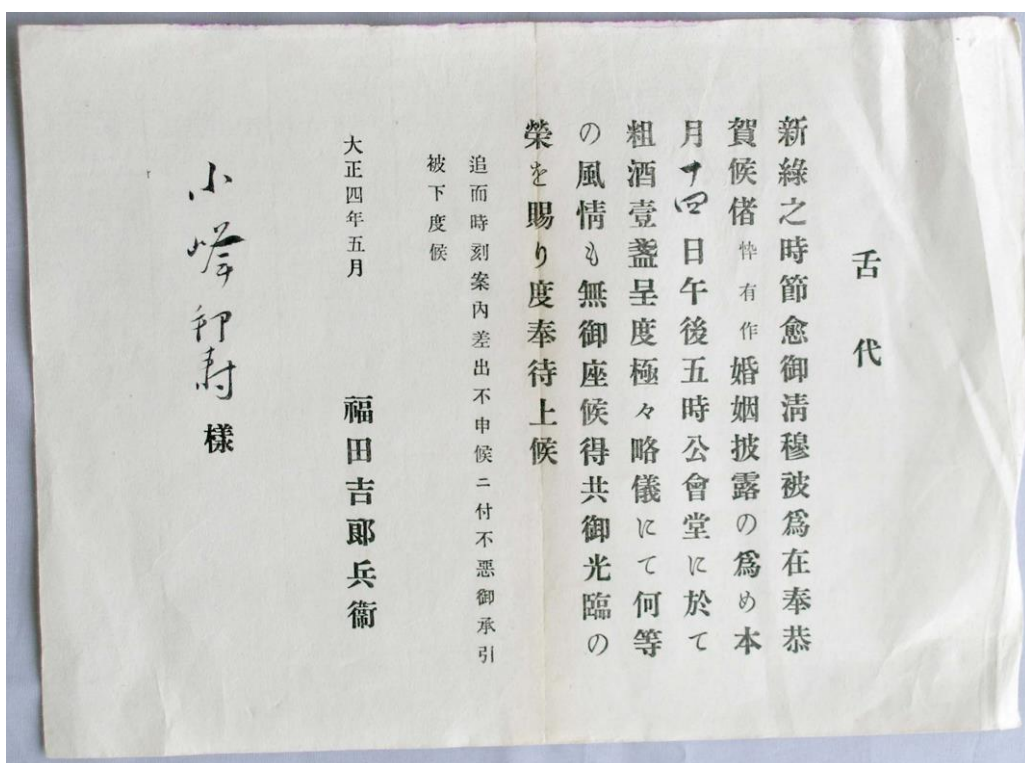


② 岐阜県史蹟指定報告祭



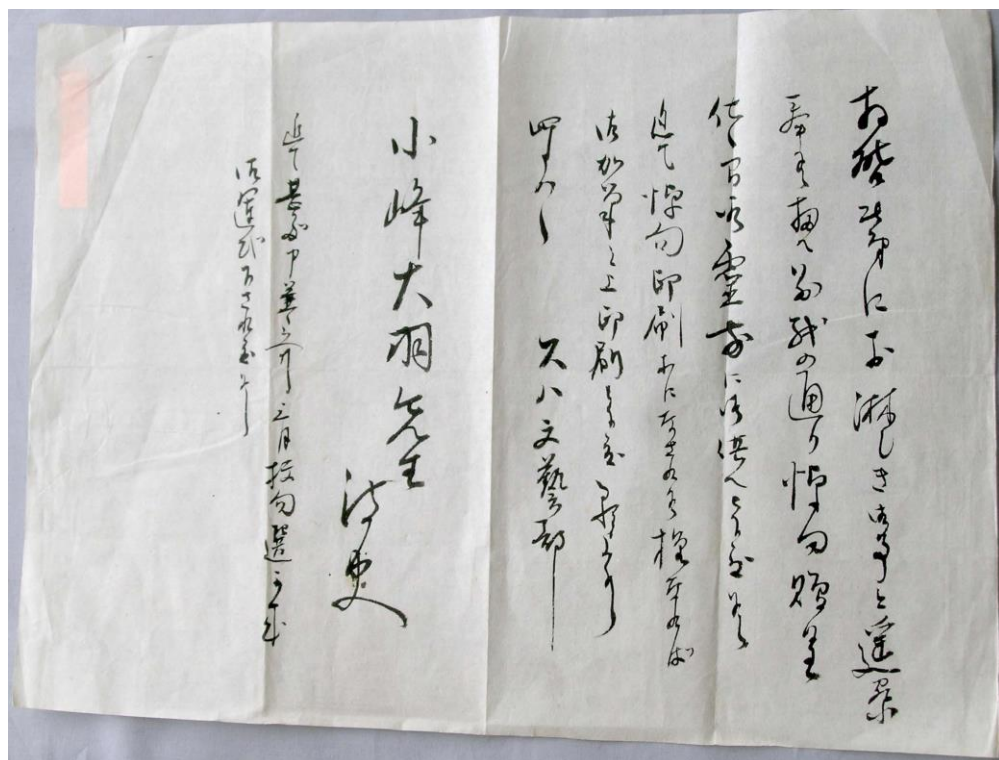
③

婚姻披露宴 福田吉郎兵衛



④

手紙





『第一卷第一号八月号 飛驒排史志料（一）』

『第一卷第十一号八月号 千代尼と細江千尺』



『第二卷第二号十一月号 彩管餘録（一）』

『第二卷第四号五月号 彩管餘録（二）』

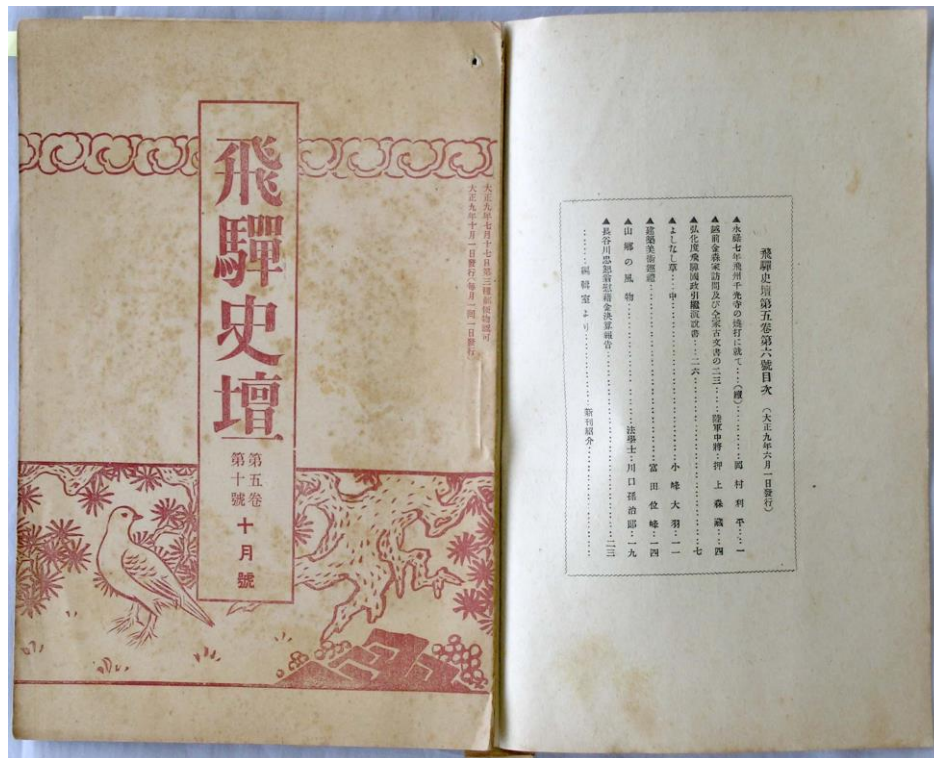
『第二卷第九号十一月号 彩管餘録（三）』



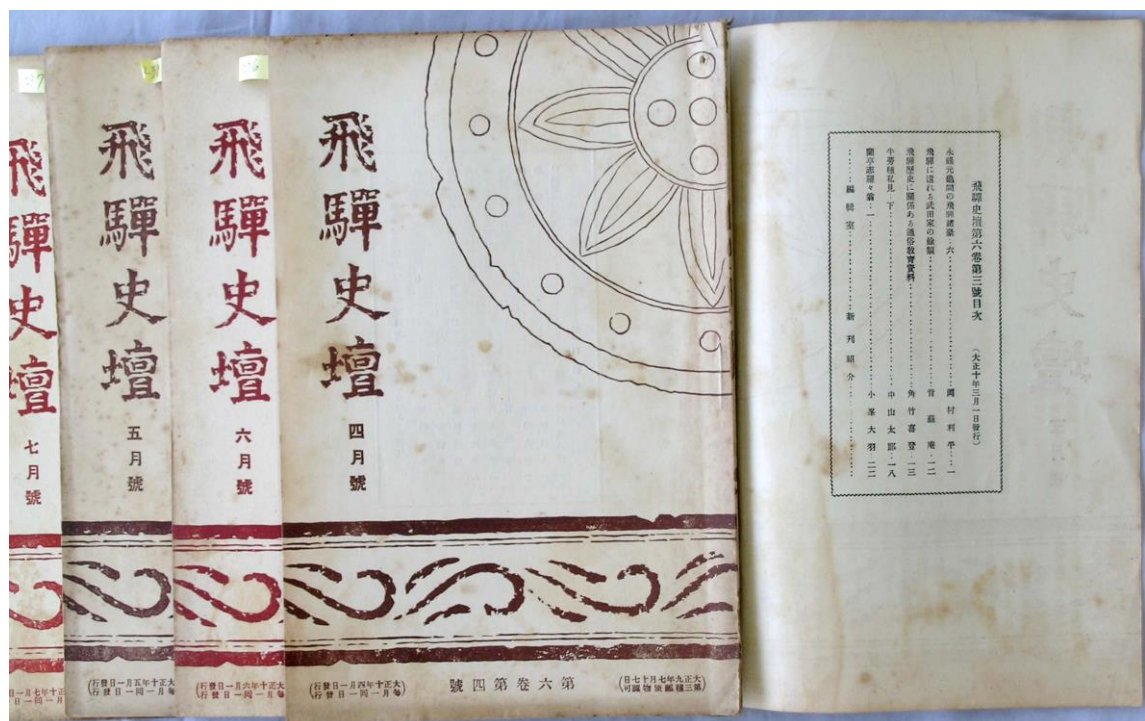
『第三卷第二号五月号 彩管餘録 三』 『第三卷第三号六月号 彩管餘録 四』
『第三卷第七号十月号 彩管餘録 五』 『第三卷第八号十一月号 彩管餘録 六』
『第三卷第九号十二月号 彩管餘録 七』 『第三卷第十号三月号 五松庵不及宗匠』
『第三卷第十一号三月号 飛驒秀文と相國寺周文』



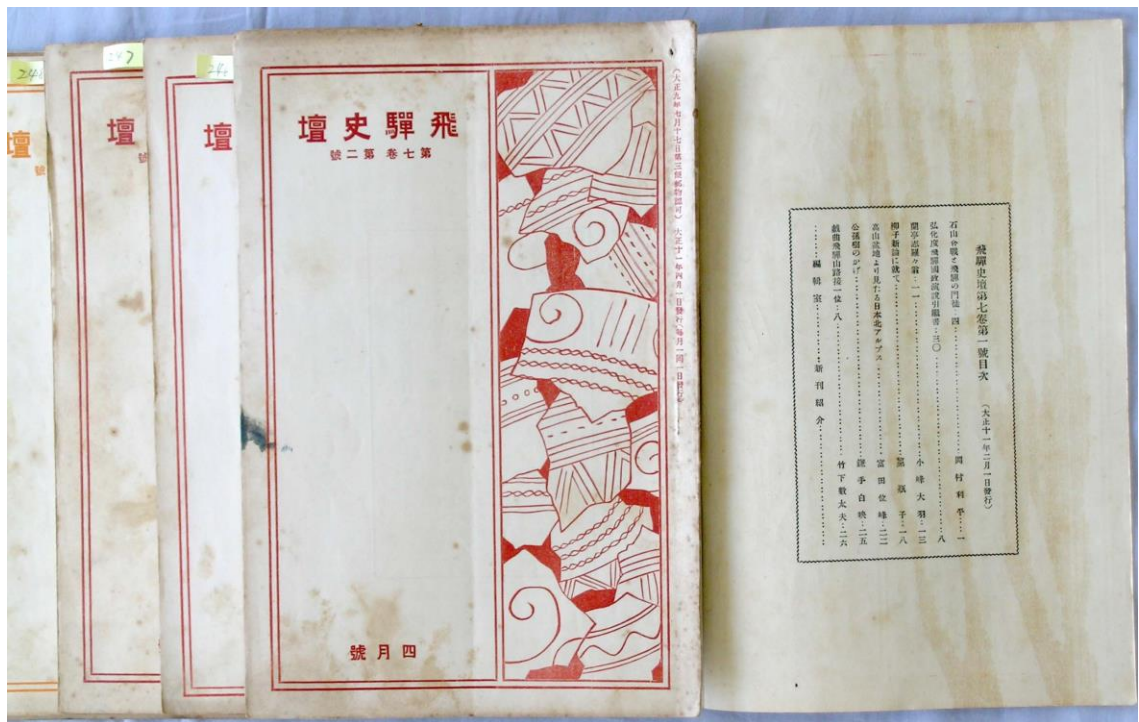
『第四卷第二号八月号 彩管餘録 八』
『第四卷第三号九月号 江鷗と雲橋社』
『第四卷第四号十月号 よしなし草 上』



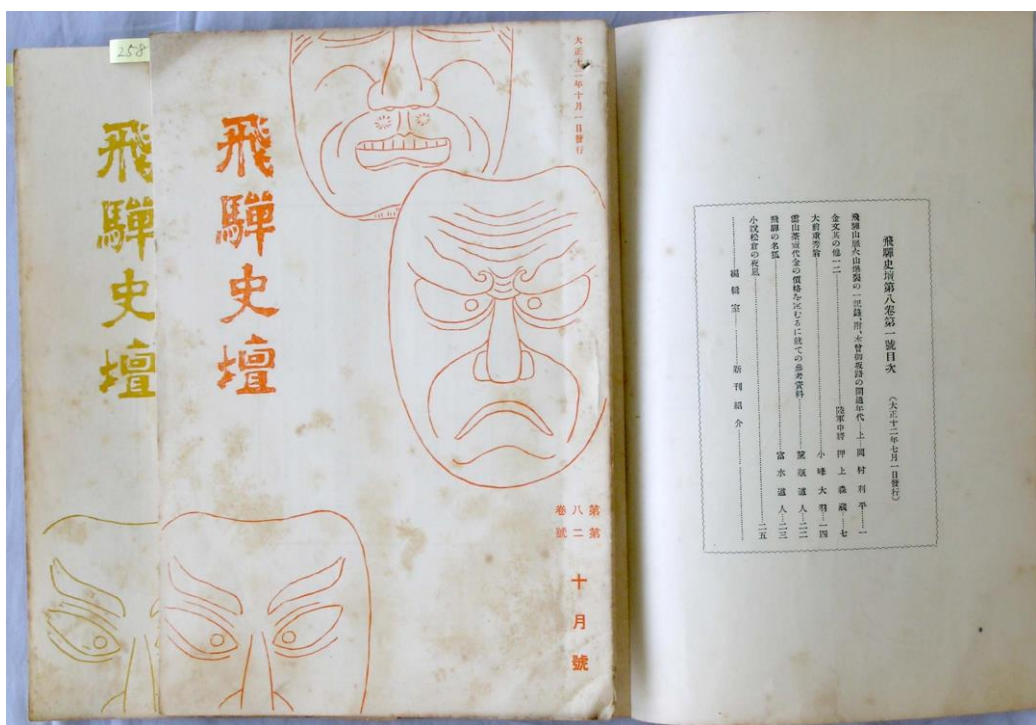
『第五卷第六号六月号 よしなし草 下』
『第五卷第十号十月号 彩管餘録 九』



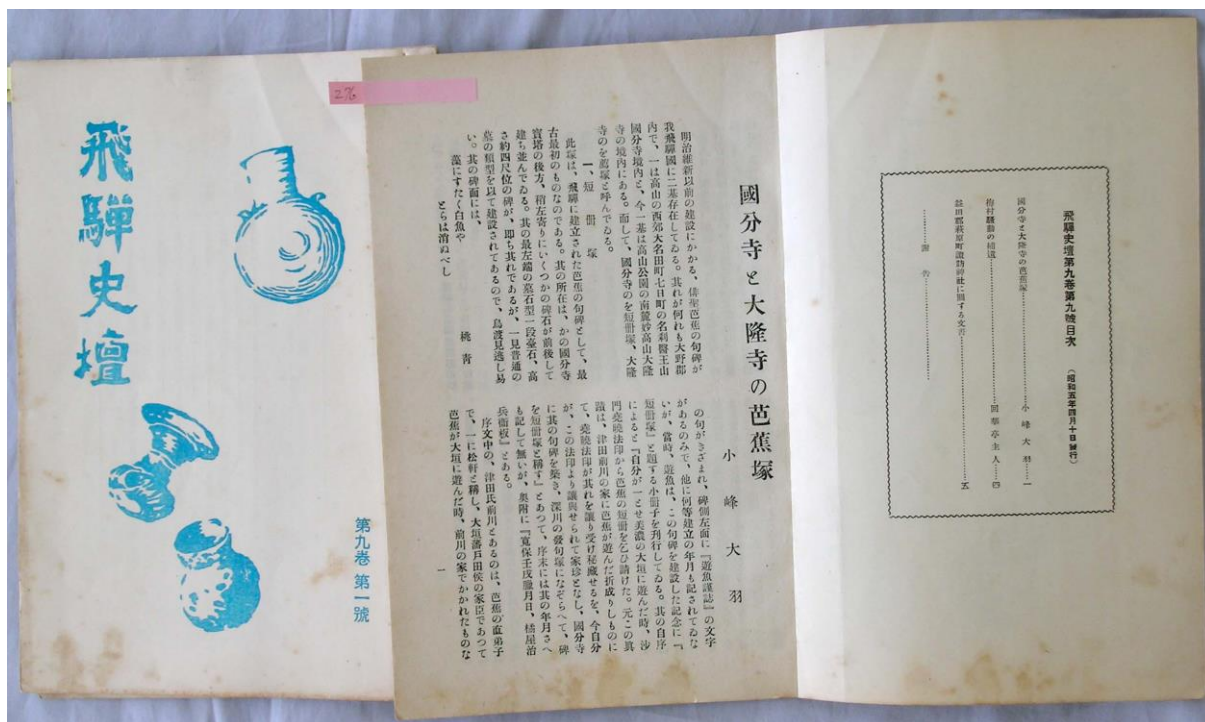
『第六卷第三号三月号 蘭亭志羅々翁 一』
『第六卷第五号五月号 蘭亭志羅々翁 三』
『第六卷第七号七月号 蘭亭志羅々翁 五』
『第六卷第九号九月号 蘭亭志羅々翁 七』
『第六卷第十号十月号 蘭亭志羅々翁 八』
『第六卷第十一号十二月号 蘭亭志羅々翁 九』
『第六卷第四号四月号 蘭亭志羅々翁 二』
『第六卷第六号六月号 蘭亭志羅々翁 四』
『第六卷第八号八月号 蘭亭志羅々翁 六』
『第六卷第十二号正月号 蘭亭志羅々翁 十』



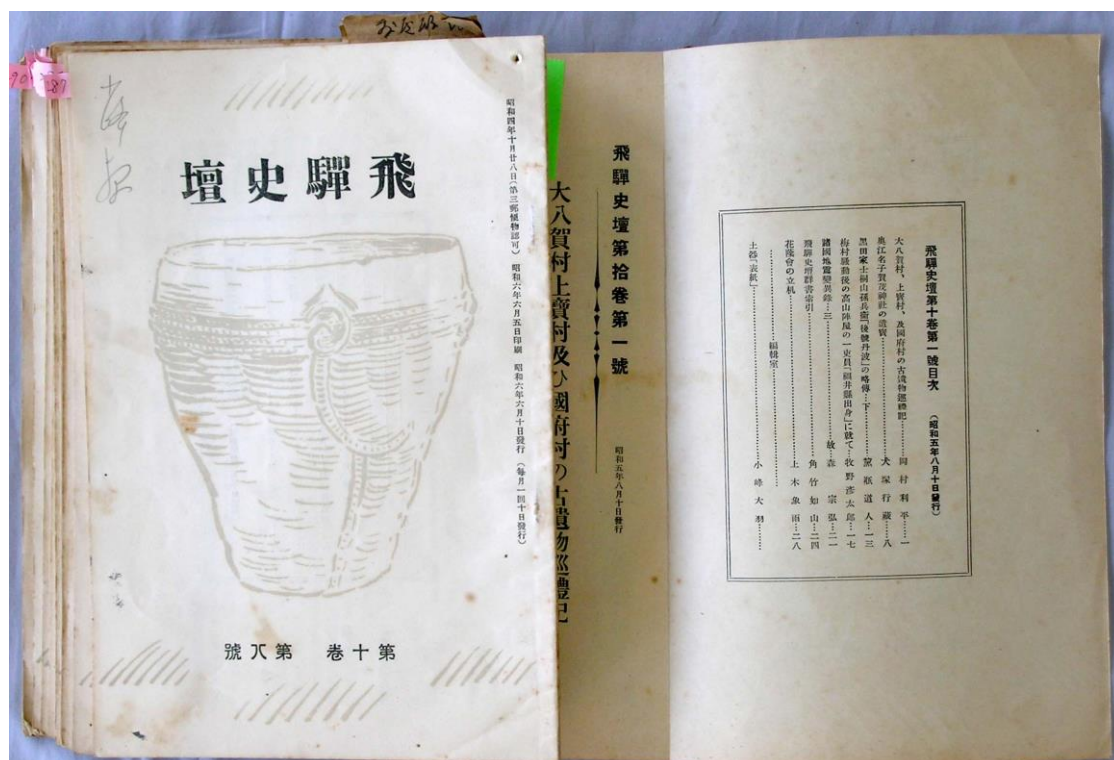
- 『第七卷第一号二月号 蘭亭志羅々翁 十一』 『第七卷第二号四月号 蘭亭志羅々翁 十二』
 『第七卷第三号五月号 亮派彫工の系統と一刀彫 上』
 『第七卷第四号七月号 亮派彫工の系統と一刀彫 中』
 『第七卷第五号八月号 亮派彫工の系統と一刀彫 下ノ一』
 『第七卷第六号九月号 亮派彫工の系統と一刀彫 下ノ二』



- 『第八卷第一号七月号 大前重秀翁』
 『第八卷第二号十月号 彩管餘録 続』
 『第八卷第四号夏季号 蘭亭尚齒会之卷物』



『第九卷第九号五月号 國分寺と大隆寺の芭蕉塚』
 『第九卷第十号六月号 井田嘉蔵次の一面』
 『第九卷第十二号七月号 大秀翁の貢松實御贄辭並歌』



『第十卷第一号八月号～十二号一月号 表紙「縄紋土器」』

九 下絵

① 人物画



『布袋像』



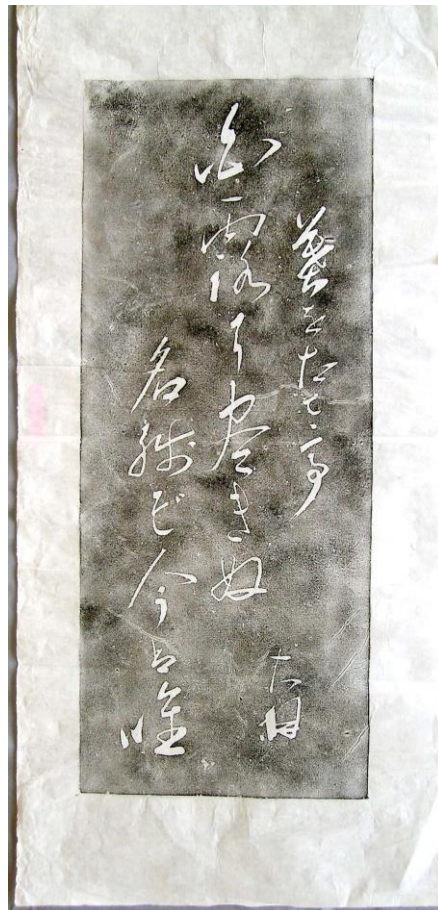
『風俗人物画』



『蕉門十哲』

一〇 拓本

『墓をたてて白露に尽きぬ名残ぞ今は唯』





『落款各種』



『絵』



『神苑にかかやく泉初日今』



『門松に海の曙蜃が戸々』



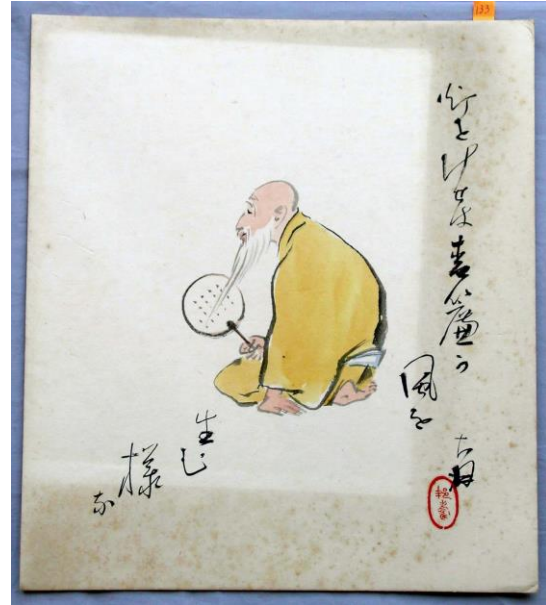
『朝の灯にはや元日の湯がたぎる』



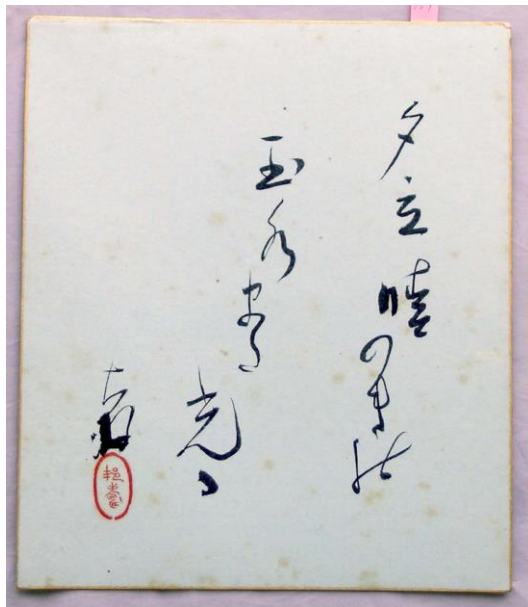
『筆洗ふそれも鶯の餌すり鉢』



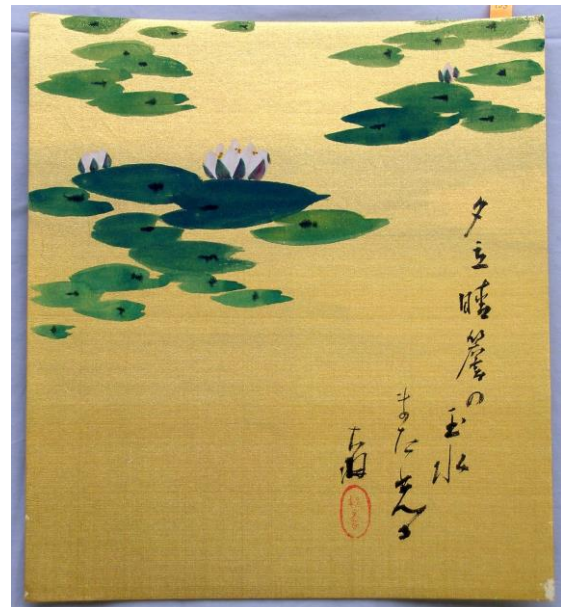
『螢行くやほつほつ顔にあたる雨』



『灯をけせは青簾か風を生む様な』



『夕立晴簷の玉水また光る』





『松風や木地のろふちに気のすめる』



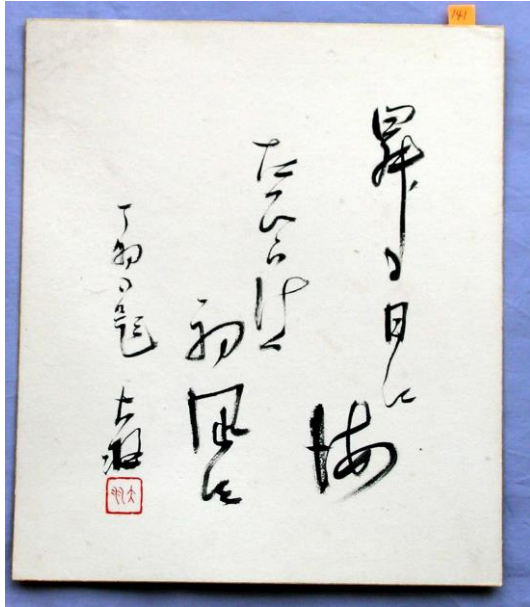
『来るものにみそさゝい有り木々のさひ』



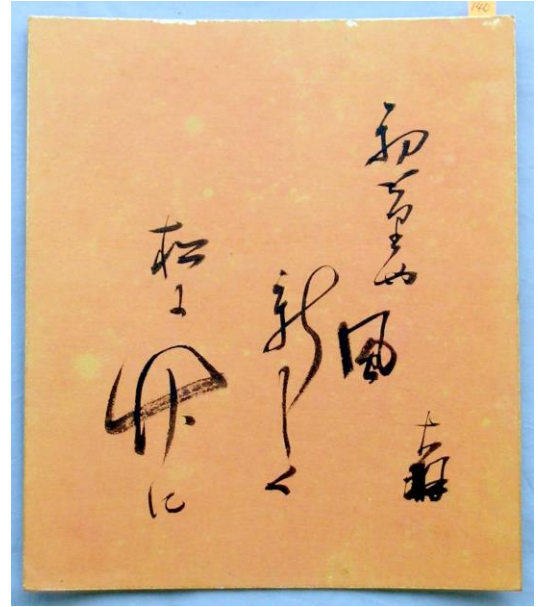
『露寒し人に飛び得ぬ虫の居る』



『蛇の来て日向のふとんふくらめり』



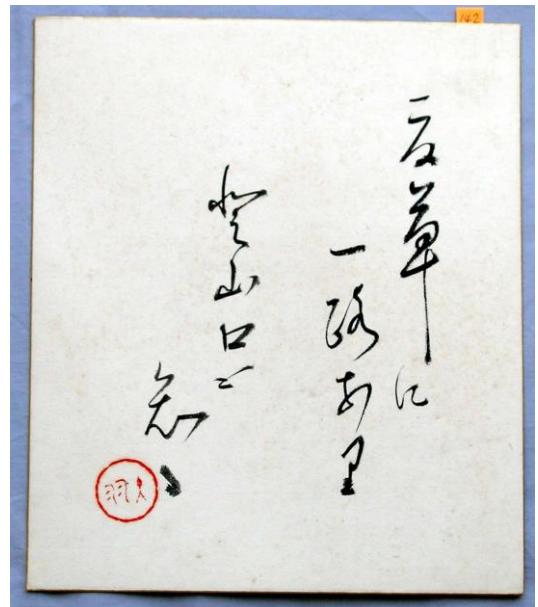
『昇る日に海たひらけく初風す』



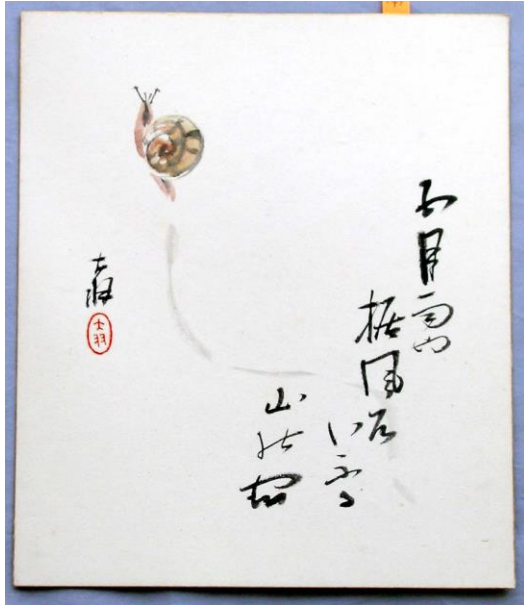
『初とりや風新しく松に竹に』



『人待つや弥生三日の朝くもり』



『夏草に一路あり登山口と知る』



『五月雨や据風呂いふる山の宿』



『西日さし入る窓となり繩を打つ』



『下か里のすずしき露に鎌握る』



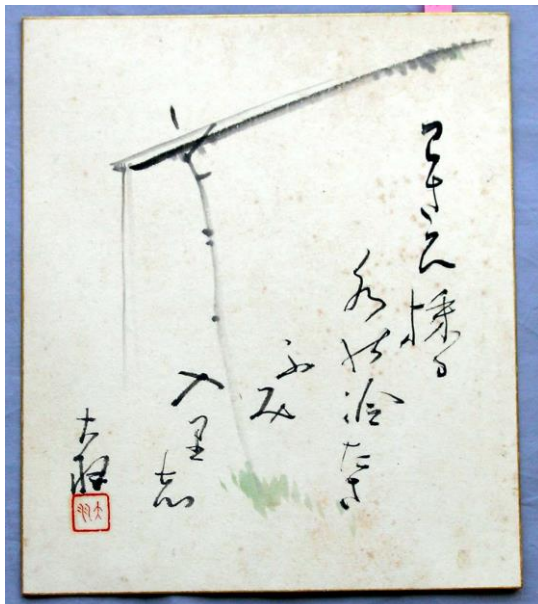
『ろふさきや連峰の雪すてにきゆ』



『朝寒や窓外のへちま枯れ勝ちに』



『遠花火野風呂に居れば又揚る』



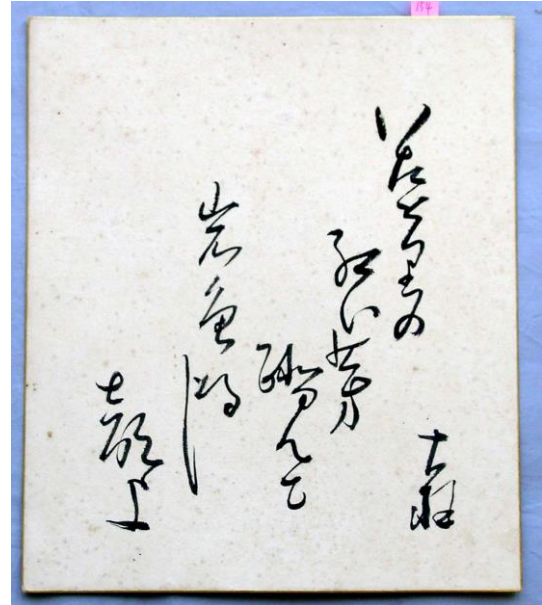
『わさび採る水の冷たさふみ入りし』



『露にぬれて大またに草踏み行く』



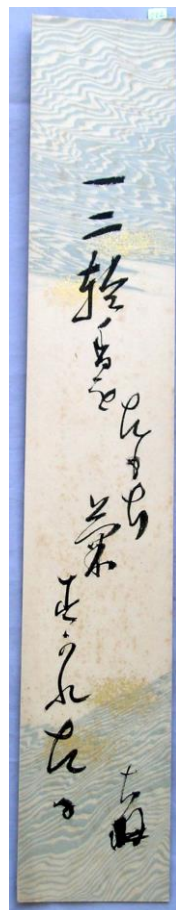
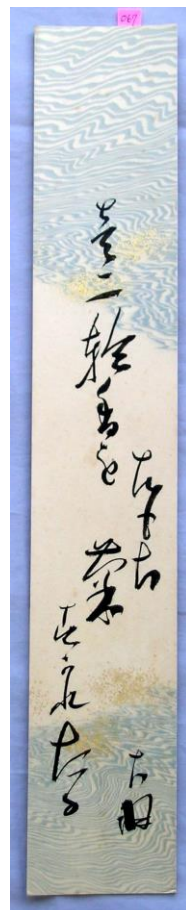
『絵』



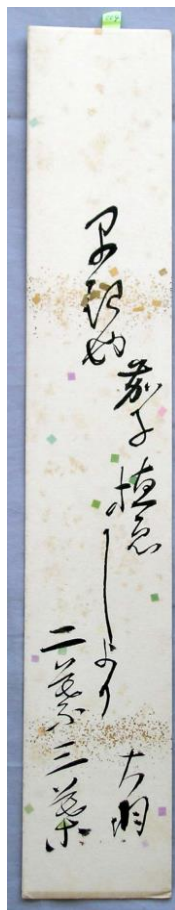
『いたとりの紅い芽踏んで岩魚得し』

一三 短冊

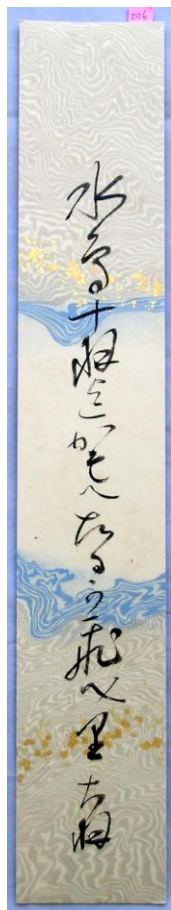
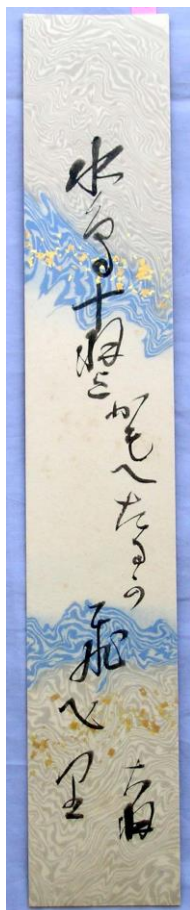
『一二輪香をたち菊すかれたる』



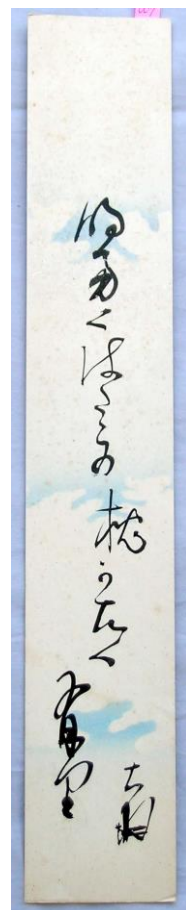
『早起や茄子植ゑしより二葉三葉』



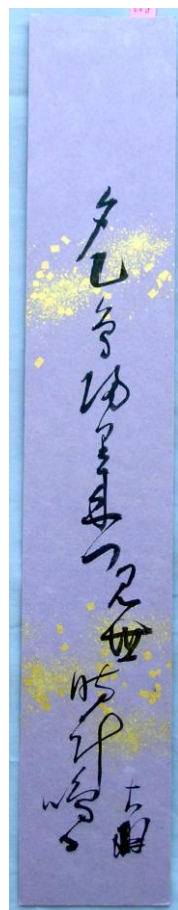
『水鳥十羽迄かそへたるか飛べり』



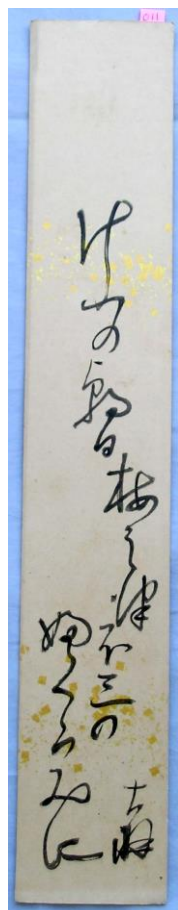
『明易くはたこの枕かたく有り』



『夕乙鳥帰り来つ見せ時計鳴る』

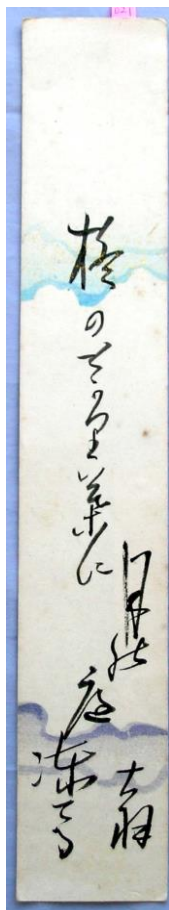


『けふの朝日梅のつぼみのふくらみに』



『向日葵に薫屋ほこり日に立てり』

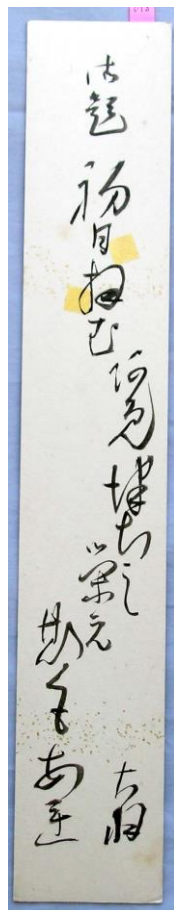




『杢のとがり葉に月の庭凍てる』



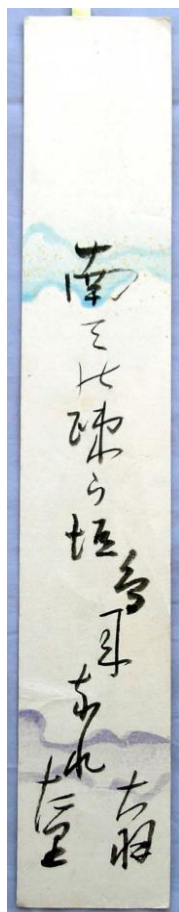
『藪尻の庭鶯のなかず来し』



『御題初日拝むあめつちの栄え斯くもあれ』



『朝来つゝ鶯のまた夕に来つ』



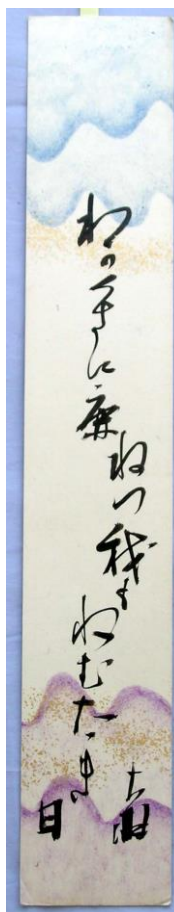
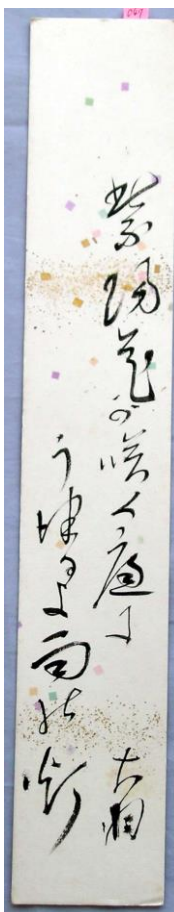
『南天の疎ら垣鳥来なれたり』

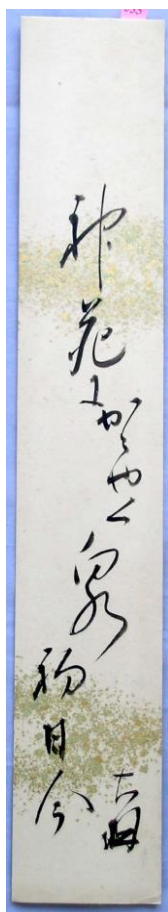


『紫陽花が咲く庭にうつるよ雨の灯』

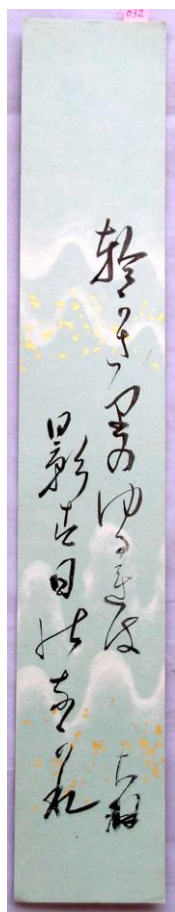


『わかくさに鹿ねつ我もねむたき日』





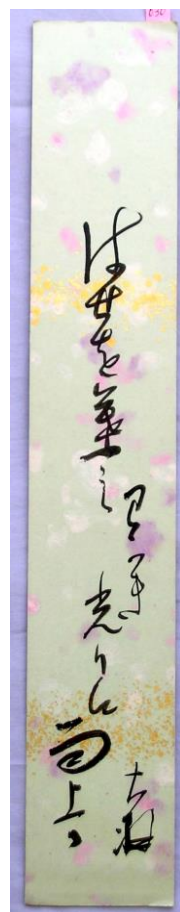
『神苑にかがやく泉初日今』



『輪かざりのゆるきは影す日のながれ』



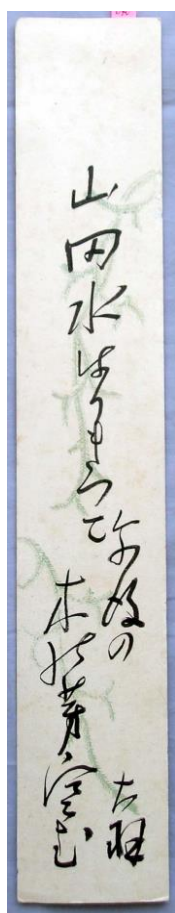
『秋海棠の日に疎く木戸さゝれたり』



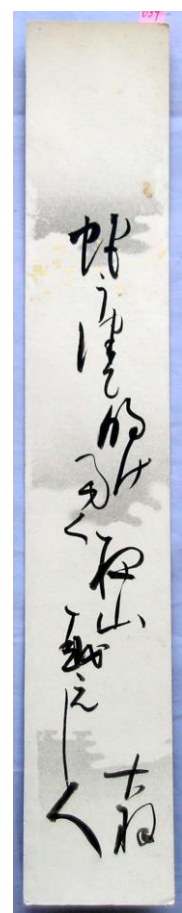
『はせを葉のわかき光りに雨上る』



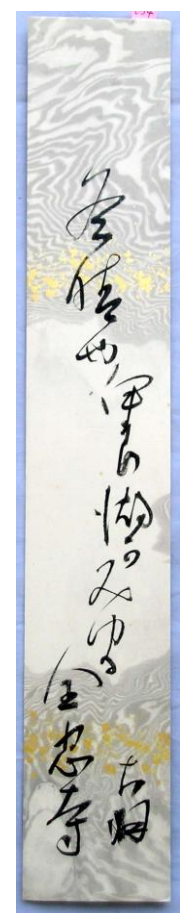
『春愁や己が影淡く灯にそむく』



『山田水はりきつて午後の木の芽寒む』



『鉦うって明けゆく夜山越えし人』



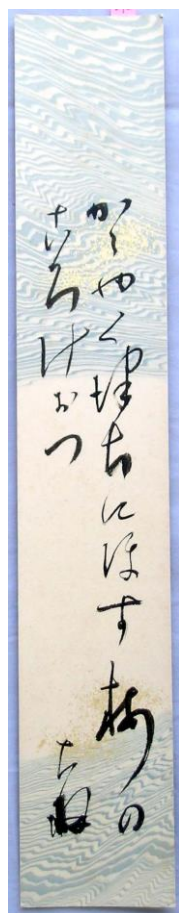
『冬晴や伊良湖がみゆる全忠寺』



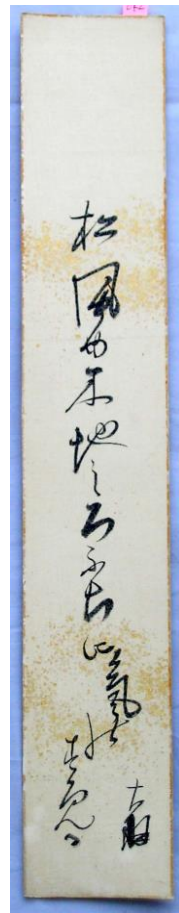
『暑き砂踏みなれて二三日ひやけせし』



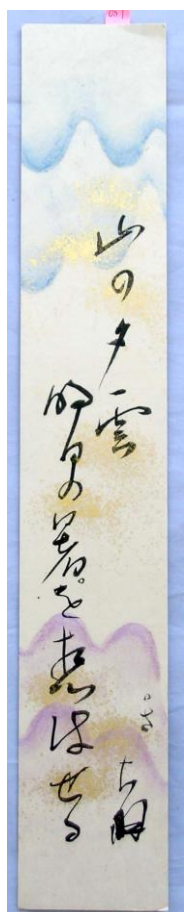
『白雲の長閑に比枝を放れたり』



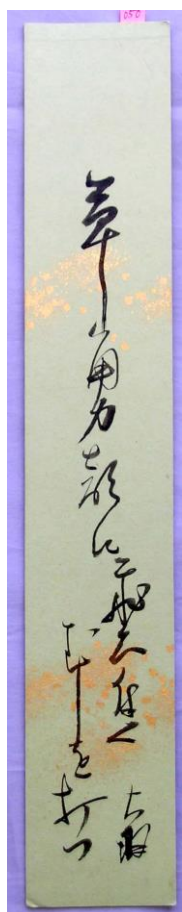
『かがやくつちにほす梅のころげおつ』



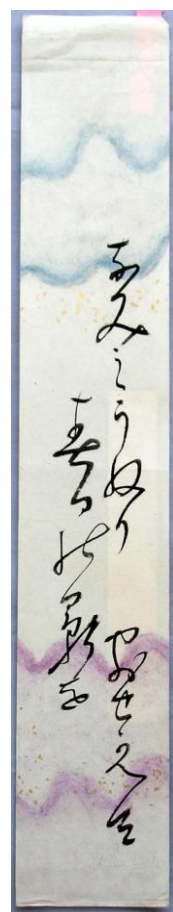
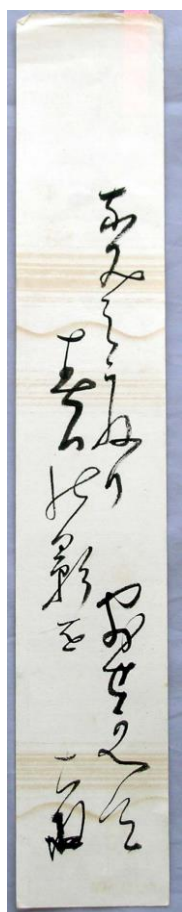
『松風や木地のろふちに気のすめる』



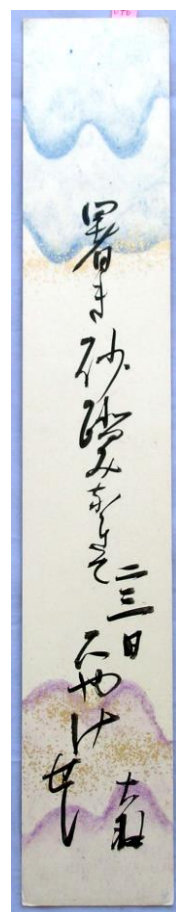
『山の夕雲明日の暑さを想わせる』



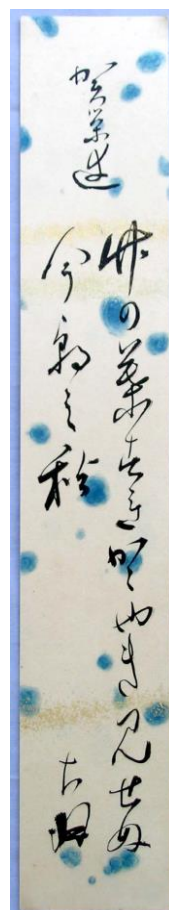
『草角力顔に飛び付くむしを打つ』



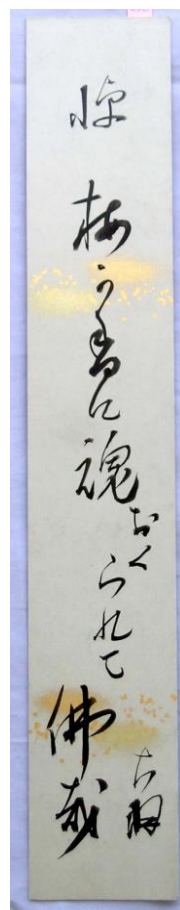
『なみうねり春日のかげを寄せかへす』



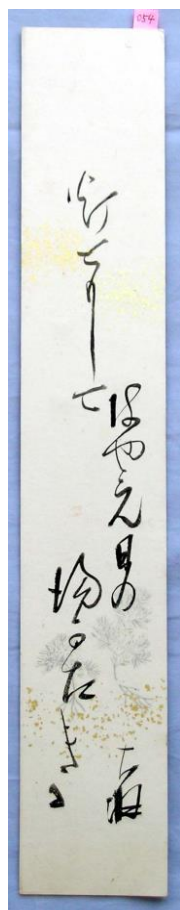
『竹の葉すれかがやき見せぬ今朝の秋』



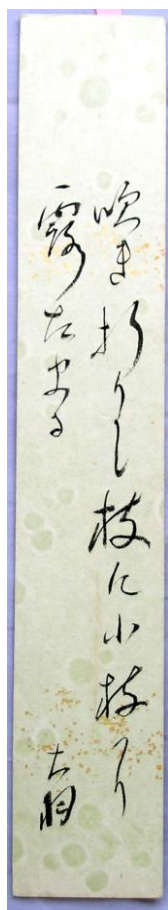
『悼 梅が香に魂おくられて佛哉』



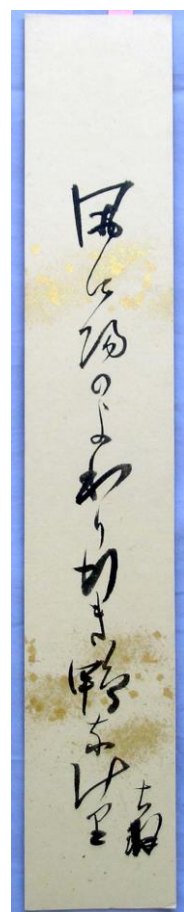
『灯としてもはや元日の湯がたぎる』



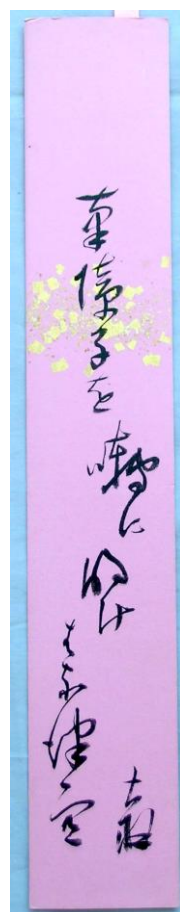
『吹き折りし枝の小枝に露たまる』



『風に陽のよわり行き鴨なけり』



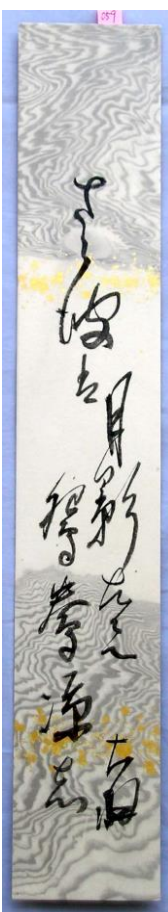
『南障子を嚙に明けはなつ空』



『梨花の月君こん程にくもりけり』

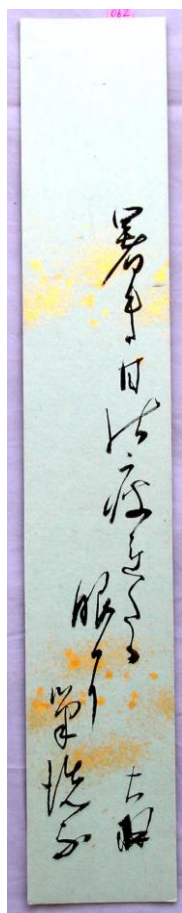


『ささ波は月影たへへ鴛鴦涼し』





『幟立つ母なん遊女なりけらし』



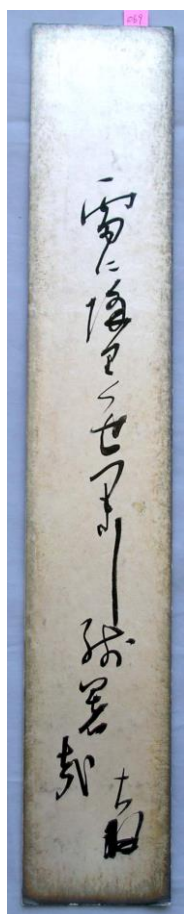
『暑き日の疲れたる眼に筆洗ふ』



『小鳥地につく露寒のわら焼けり』



『陽炎や小磯の砂もふきたてす』



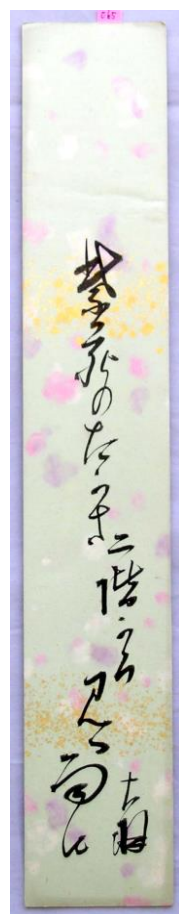
『雷に降りくせつきし残暑かな』



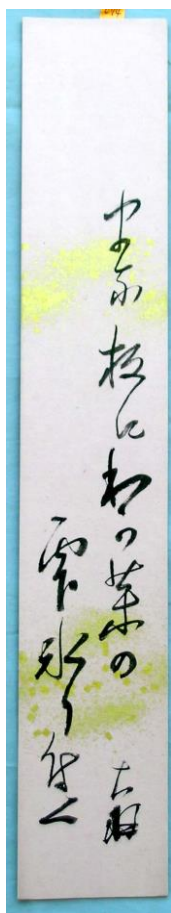
『つくし影もつほどの陽に寝ころべり』



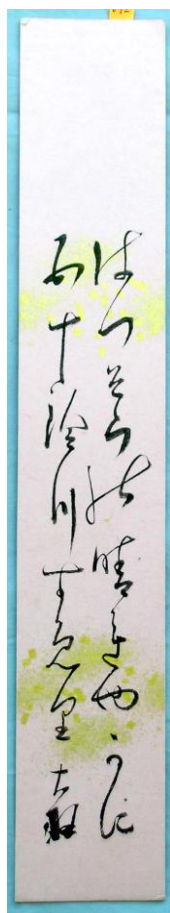
『鶯替の白梅に夜明けたらず』



『紫苑のたかき二階から見る雨に』



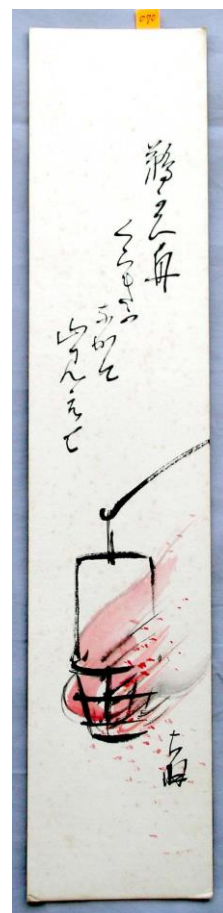
『まな板にわか菜の雫氷付く』



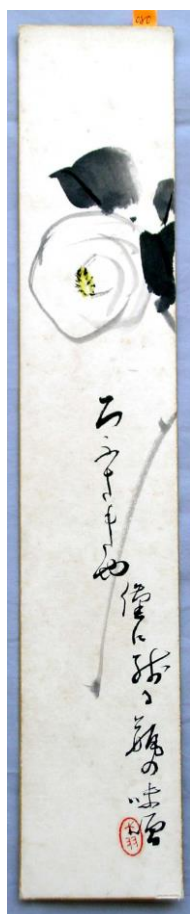
『はつそらの晴れやかに五十鈴川すめり』



『炎天や塩田の橋のそりを踏む』



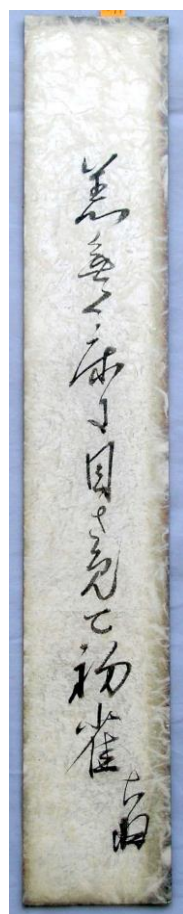
『鶺鴒かい舟くらきがなかで山見えて』



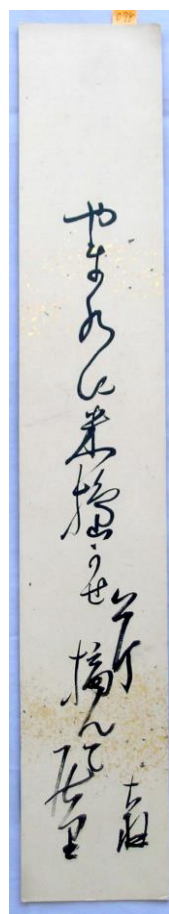
『ろふさぎや僅かに残る瓶の味噌』



『山は紅葉する小鳥来るひさし』



『恙無く床に目さめて初雀』



『やまの水に米搗かせ芹摘んで居り』



『虫の音に耳をすまして墨を磨る』



『霞一としきり木の根掘りおこす』



『津ば焼や浪のうねりを見つたふ』



『銀河更けて露おくものの皆光る』



『銀河更けて露おくものの皆光る』



『菜飯くふて藪鶯のしきり鳴くし』

一五
① 皿 陶器



『月呀ゆる木影空しくふんで行く』



『水鳥近く宿りざわめく闇なか』



『春暁や森の小鳥の音に晴るる』



『朝来つるうぐいすのまた夕来つ』



『朝鳥鳴き晴るるや豆打つむしろ』



『暑き砂ふみなれて二三日ひやけせし』



②
盃

『七月のうぐいすに山頂の浄地踏む』



『夏草に一路あり登山口と知る』



『すたれ別つからのすゝ虫無きあした』



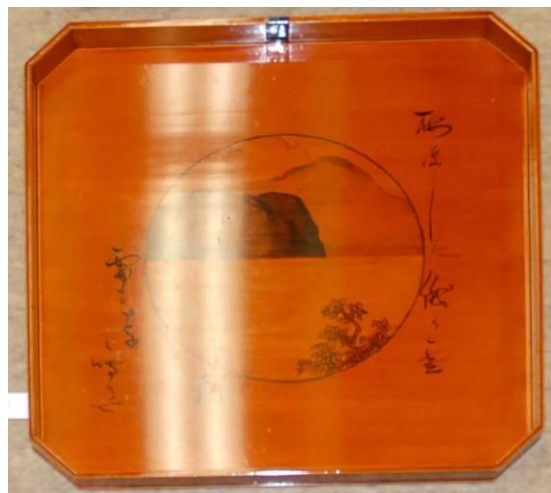
『棚のへちま静に二百十日尽く』



『猫柳のほうけ見つ田芹摘み尽く日』



『摘草に恋ありて友と相そむく』



『梅ほしに俄が雲雷も遠鳴りて』



『日の丘や小松がもとの藪柑子』



『尼寺やみそる、宵をきらすはる』



『野施行の餅投すれば闇に水の』



『歌かるた吹雪となりて夜を徹す』

一七 参考資料

① 年譜

小 峰 大 羽 年 譜	
1873 (明治6)	2 月 15 日 東京府士族小峰一邦の嫡男として神田駿河台に誕生
1891 (明治24) 18 才	府立築地中学卒業 在学中、狩野洞谷に絵を学ぶ
1894 (明治27) 21 才	俳句作品を発表し始める
1903 (明治36) 30 才	東亜新報社を創立
1909 (明治42) 36 才	新撰季語辞典の原稿を秀英舎火災の為消失
1910 (明治43) 37 才	俳諧雑誌「高潮」を発行、主宰となる
1911 (明治44) 38 才	「俳味」増刊現代借家五十家句選に 30 句掲載
1912 (明治45) 39 才	4 月 高山来訪、花蔭会・笹魚吟社聯合歓迎句会於東照宮
1913 (大正2) 40 才	高山へ移住
1914 (大正3) 41 才	押上森蔵、岡村利平らと飛騨史談会を起こし「飛騨史壇」を発行、大正 15 年まで編輯を担当
1928 (昭和3) 55 才	6 月 中心となり「山ずみ会」を結成
1932 (昭和7) 59 才	名古屋市栄町善昌寺へ転居
1932 (昭和7) 59 才	11 月 俳誌「こだま」創刊、昭和 19 年百号を以て止むなく終刊
1944 (昭和19) 71 才	11 月 東京・大森 娘 小峰新樹のもとへ転居
1945 (昭和20) 72 才	5 月 24 日 午後 3 時 30 分空襲の直後逝去 墓地は港区青山霊園

② 著編書

蘭亭遺稿 (前編・後編)・俳句大観・類題句集
 季題大字典・東京語字典・季題解釈・田中大秀
 その他発表論文多数

小峰大羽展 資料目録

③ 「小峰大羽」展

日 時

平成 21 年 2 月 21 日(土)～22 日(日)

午前 10 時～午後 5 時(最終日は午後 4 時まで)

会 場

高山市図書館「煥章館」生涯学習ホール

主 催

社団法人高山市文化協会

共 催

高山市

——<小峰大羽展の様態>——



高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十一年三月発行

編集 社団法人高山市文化協会